

**広島・長崎への原爆投下 75 年に際し、
放射線影響研究所は原爆被爆者および被爆二世の調査を継続する**

最近、放影研の丹羽太貴理事長と放影研評議員であるジョナサン・M・サメット博士による解説記事が掲載されました。

その記事では、1945年8月6日及び9日の広島・長崎の原爆投下75年（2020年現在）の視点から、1947年以来ABCC-放影研で行われてきた研究の長い歴史について触れられています。

掲載記事では、原爆投下後に開始され世界で最も長期にわたる疫学研究の成果をもたらしたABCC-放影研の調査・研究に長年献身的にご協力いただいた原爆被爆者の方々に敬意と感謝の意を表明しています。また、放射線による遺伝的影響の可能性を把握するために行われてきた調査・研究に対する、被爆二世の方々の、かけがえのないお力添えの重要性についても述べられています。

さらに放影研における将来の調査・研究の方向性を示す戦略的な計画についても説明しています。すなわち、1) 現在の調査・研究の継続、2) 全ゲノム解析などの高度な技術を用いて行う放射線の影響を受けた集団から得られた生体試料の解析、3) 放影研における全てのデータの統合とデジタル化、4) 一般市民、特に被爆者と被爆二世の方々、そして世界の人々に放影研の調査結果と知見ならびにその重要性をお知らせするため、広報活動に力をいれていくこと、等について説明しています。

doi.10.1093/carcin/bgaa104

* doi (digital object identifiers) とは、ほとんどのデジタル情報に与えられた、コンテンツ（論文や作品等）独自の不変番号で、インターネットの検索を通じてオンライン資料を特定するために用いられます。

本資料は、専門家でない方向けに出来るだけわかりやすく解説することを最優先しています。そのため専門的な内容は割愛しており、論文内容を完全に再現しているものではありません。より詳しい内容は専門の学術誌に掲載された論文をご覧ください。